

後付け安全装置に対する意識と効果からみた交通安全対策のジレンマ

西堀泰英1、楊甲1、松尾幸二郎2、樋口恵一3、三村泰広1、安藤良輔1 (1(公財)豊田都市交通研究所、2豊橋技術科学大学、3大同大学)

背景と目的

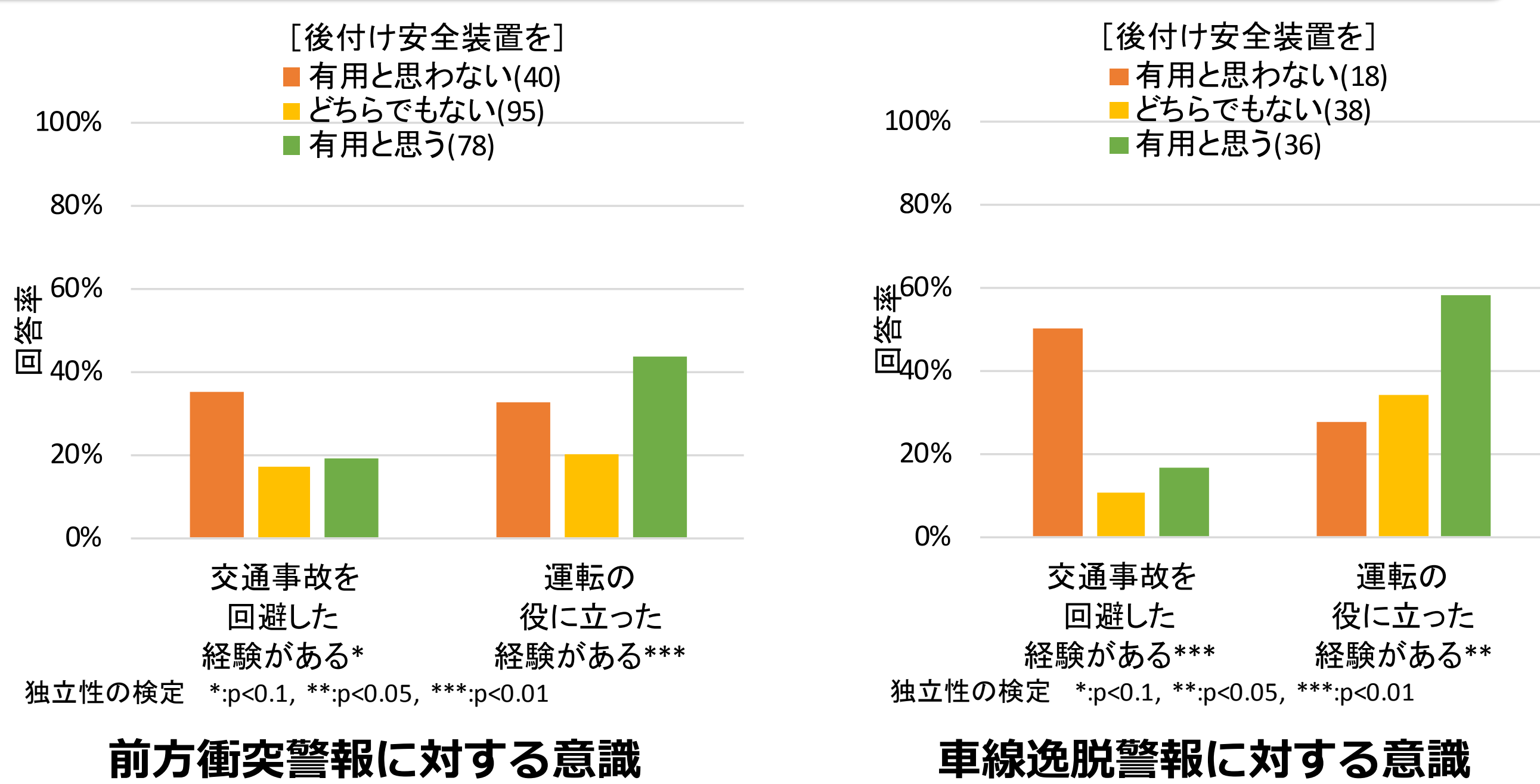
- 「世界一安全な道路交通」の目標実現（第10次交通安全基本計画）に向け一層の取り組みが求められる
- 安全運転サポート車（サポカー）の普及浸透が待たれるが、新車への買い替えに時間を要する
- そこで、利用中の車両に後付け可能な安全装置（以下、後付け安全装置）の活用が期待される
- 本発表は、後付け安全装置の効果や普及に向けた問題点を検討することを目的とする
- ここでの後付け安全装置は「警報」による情報提供を行う装置を対象とする

方法

- 日本全国の後付け安全装置の利用者300人を対象にアンケート調査を実施（2018年12月）
- 調査方法：Webアンケート調査、性別と年代でスクリーニング
- 回答者の平均年齢：45.8歳

結果

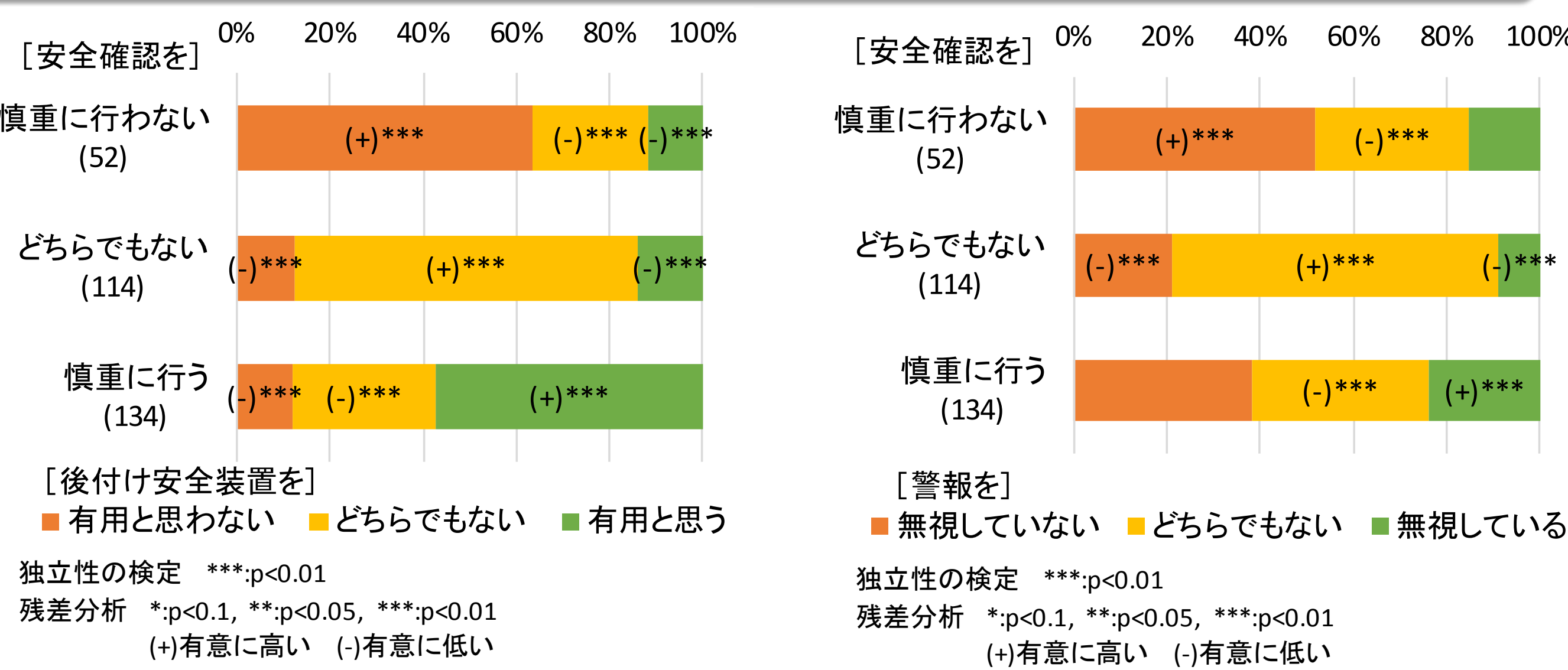
後付け安全装置への認識と効果の分析結果



- 後付け安全装置の警報の種類別に、装置を利用することによる効果などを質問し、装置への認識（有用と思うか否か）との関係性を分析 ※装置により警報の種類が異なるため警報別利用者に絞った集計
- 後付け安全装置を「有用と思う」人は、前方衝突警報や車線逸脱警報に対して**運転の役に立った経験がある**など、運転時の心理的な効果を指摘する傾向にある
- 一方「有用としない」人は「**交通事故回避**」効果を指摘する傾向にある

→後付け安全装置への認識（有用と思うか）の違いにより、後付け安全装置の利用により得られる効果が異なる

運転傾向と後付け安全装置への認識

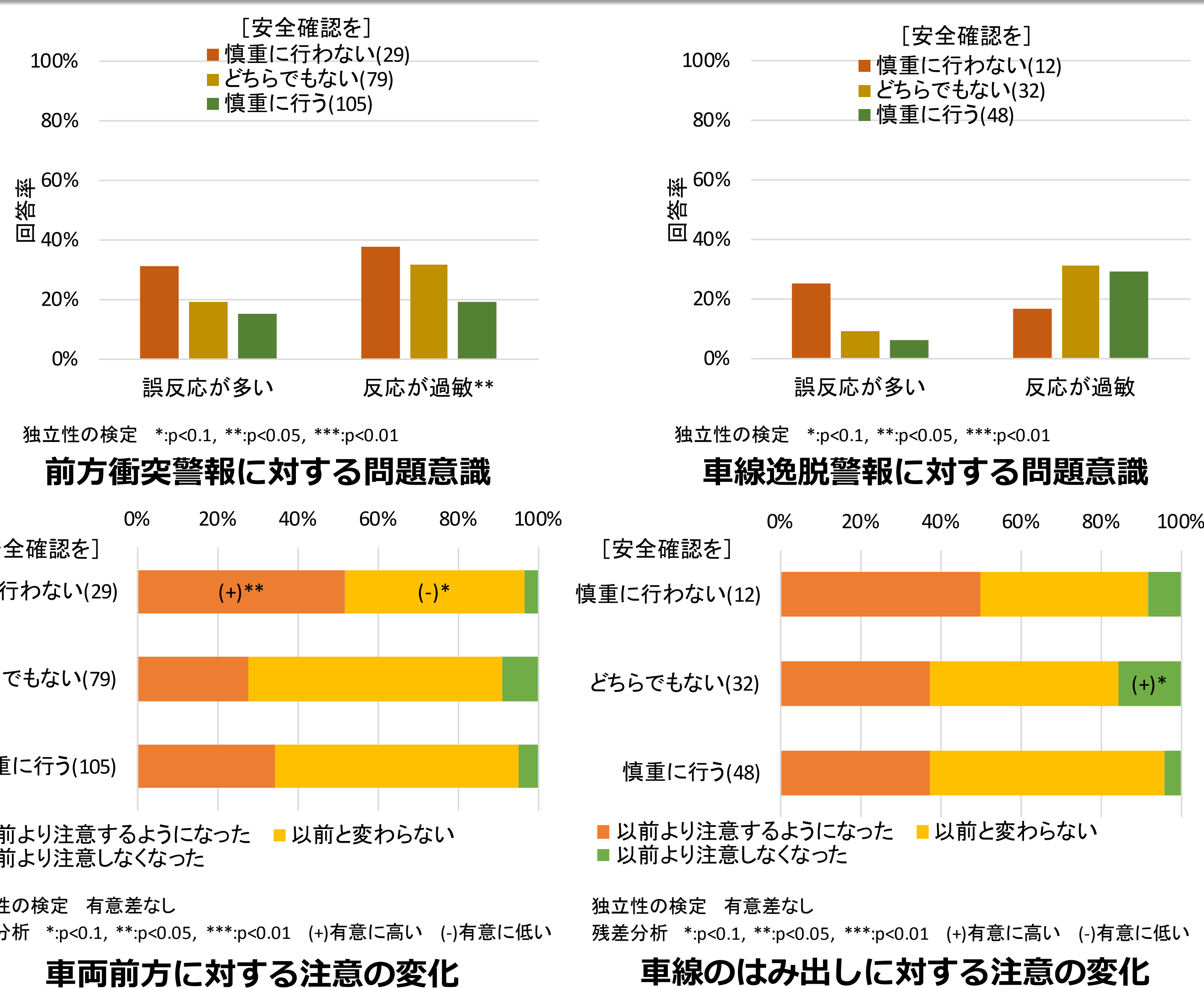


- 有用としない人の事故回避経験が多い理由を確認するため、後付け安全装置への認識と、運転スタイル(DSQ)のうち「**車線変更や交差点などでは、安全確認を慎重に行う**」かどうか（運転傾向）の関係性を分析
- 「有用としない」人は「**安全確認を慎重に行わない**」傾向にある →安全確認を慎重に行わないことで、事故リスクの高い運転をしていることが多いために、事故回避経験が多くなっていると考えられる
- 「安全確認を慎重に行わない」人は、「**警報を無視していない**」人が多い傾向

→安全確認を慎重に行わない人は、後付け安全装置を有用としない傾向にあるが、警報を生かしている

安全運転に対する意識と後付け安全装置やその警報へ認識との関係

運転傾向と装置の問題意識・装置使用による運転時の意識変化



- 「安全確認を慎重に行う」かどうかで「装置の作動に対する問題意識」や「装置使用後に運転時の注意が変化したかどうか」を分析
- 「安全確認を慎重に行わない」人は「**誤反応が多い**」との指摘が比較的多いものの**有意差は認められない**
- 「**反応が過敏**」との指摘は「**前方衝突警報**」では有意差が認められるが「**車線逸脱警報**」では有意差なし

→誤反応や過敏な反応などの装置の問題に対する意識は、運転傾向により大きな差はない

- 装置使用による運転時の意識変化については「**安全確認を慎重に行わない**」人が「**車両前方に対する注意**」を以前よりするようになったが、「**車線のはみ出しに対する注意**」は有意差なし

→後付け安全装置使用による運転時の意識変化は、運転傾向により大きな差はない

→運転傾向の違いにかかわらず、後付け安全装置を使用することで運転に対する注意を高める効果が期待できる

まとめ

- 運転時の**安全確認を慎重に行わない**人のほうが後付け安全装置が有効に作用
- 安全確認を慎重に行わない**人は装置を有用としないジレンマの状態にある
- 装置が有効に働くと期待される**有用としない未利用者**に対する普及促進が重要
- そのためには装置の有効性を周知するなど**説得的コミュニケーション**が求められる